千葉県八千代市

高津新田野馬堀

── 埋蔵文化財発掘調査報告書 ──

藤和不動産株式会社
八千代市遺跡調査会

例　　言

1．本書は千葉県八千代市八千代台南３－１－５の宅地造成に先行して実施された野馬堀遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は藤和不動産株式会社の委託を受け、八千代市教育委員会及び千葉県教育庁文化課の指導のもとに組織された八千代市遺跡調査会が実施した。

3．発掘期間は次のとおりである。

昭和60年５月28日～６月４日（実働日数６日間）

4．本書に係る資料の整理、執筆及び編集にあたっては、発掘担当者である山武考古学研究所調査員近江屋成陽が行なった。

5．本書の編集は近江屋が担当し、山武考古学研究所所長平岡和夫が総括を行なった。

6．調査組織は以下のとおりである。

調査会長　蜂谷昭夫

事務局　篠田一郎

小笠原和也

秋山利光

調査員　近江屋成陽（山武考古学研究所職員）

7．第２図中のスクリーントーンは遺存している土手の現状と調査区を表している。

8．本調査および本書の作成にあたり、下記の諸機関に御協力をいただいた。記して感謝の意を表する。

藤和不動産株式会社、開成測量株式会社

目　　次

Ⅰ．位置と考古学的環境 …… 1
Ⅱ．遺跡の現状 …… 2
Ⅲ．調査の概要 …… 4
　1．調査の方法 …… 4
　2．日　誌 …… 4
　3．標準堆積土層 …… 4
Ⅳ．検出された遺構と遺物 …… 5
　1．遺　構 …… 5
　2．遺　物 …… 8
Ⅴ．ま　と　め …… 9

挿図目次

第１図　遺跡周辺図 …… 1
第２図　遺跡現状図 …… 2
第３図　現存野馬土手断面図 …… 3
第４図　標準堆積土層図 …… 4
第５図　発掘全体図 …… 6
第６図　北側・南側溝セクション …… 7
第７図　出土遺物 …… 8

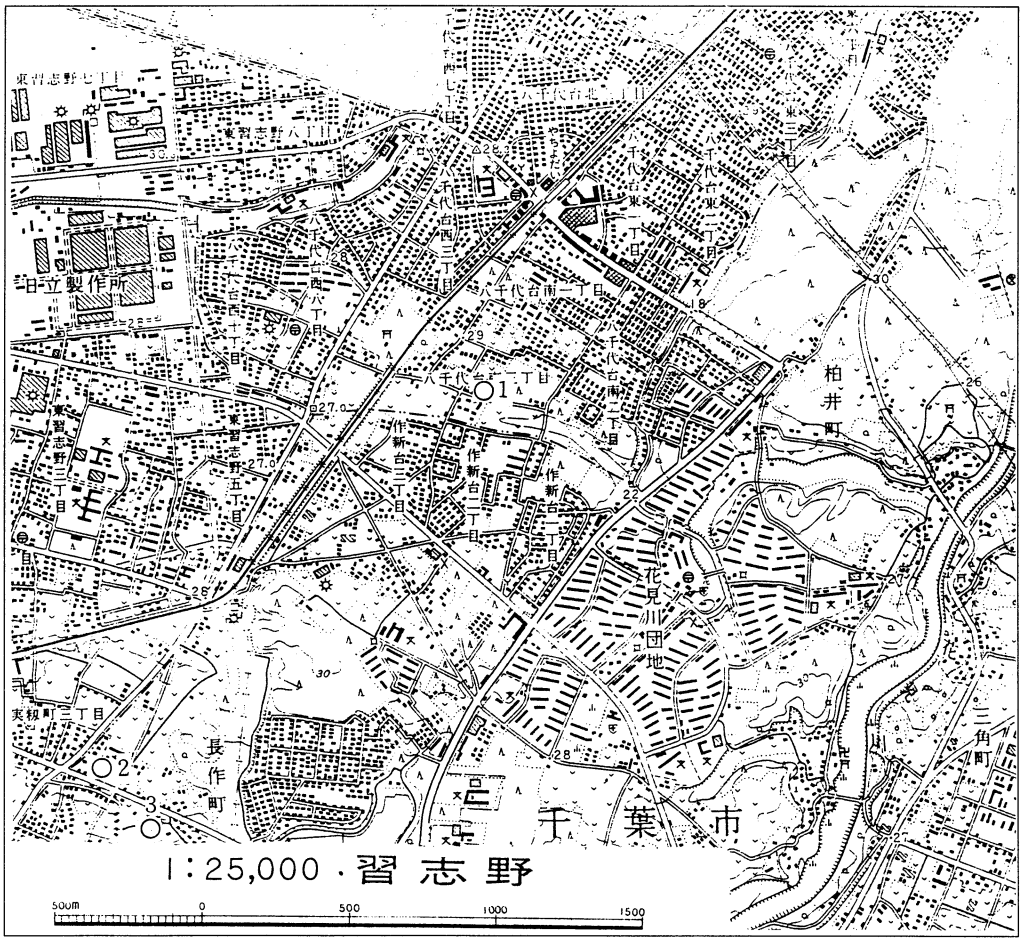
写真図版

図版１　No.4 トレンチ　遺構確認状況 …… 11
　　No.4 トレンチ　北側溝検出状況 …… 11
図版２　No.6 トレンチ　南側溝検出状況 …… 12
　　出土遺物 …… 12

Ⅰ．位置と考古学的環境

本遺跡は京成線八千代台駅南約１㎞に位置し、市内を南北に貫流する新川によって浸食された樹枝状の台地上にある。標高は25.5m。地目は畑である。

本遺跡の所在する八千代市は、旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が数多く分布している。周辺の時代が近い遺跡としては、高津部田の谷に面する標高20mの台地の東縁に八千代市遺跡番号80番の高津館跡がある。ここでは「二重堀」といわれる空壕などいくらかの遺構が残っている。築造の時代は鎌倉時代以降で、当地域の土豪の館跡と考えられている。また、京成線勝田台駅より北方、1.3㎞に村上供養塚がある。ここでは、寛永通宝の古寛永が多く出土したため17世紀中葉の築造と考えられている。さらに、本遺跡に近い千葉市には、縄文早期の遺跡、３城山貝塚、中期の遺跡、２南門原遺跡などがある。



１．高津新田野馬堀遺跡　２．南門原遺跡　３．城山貝塚

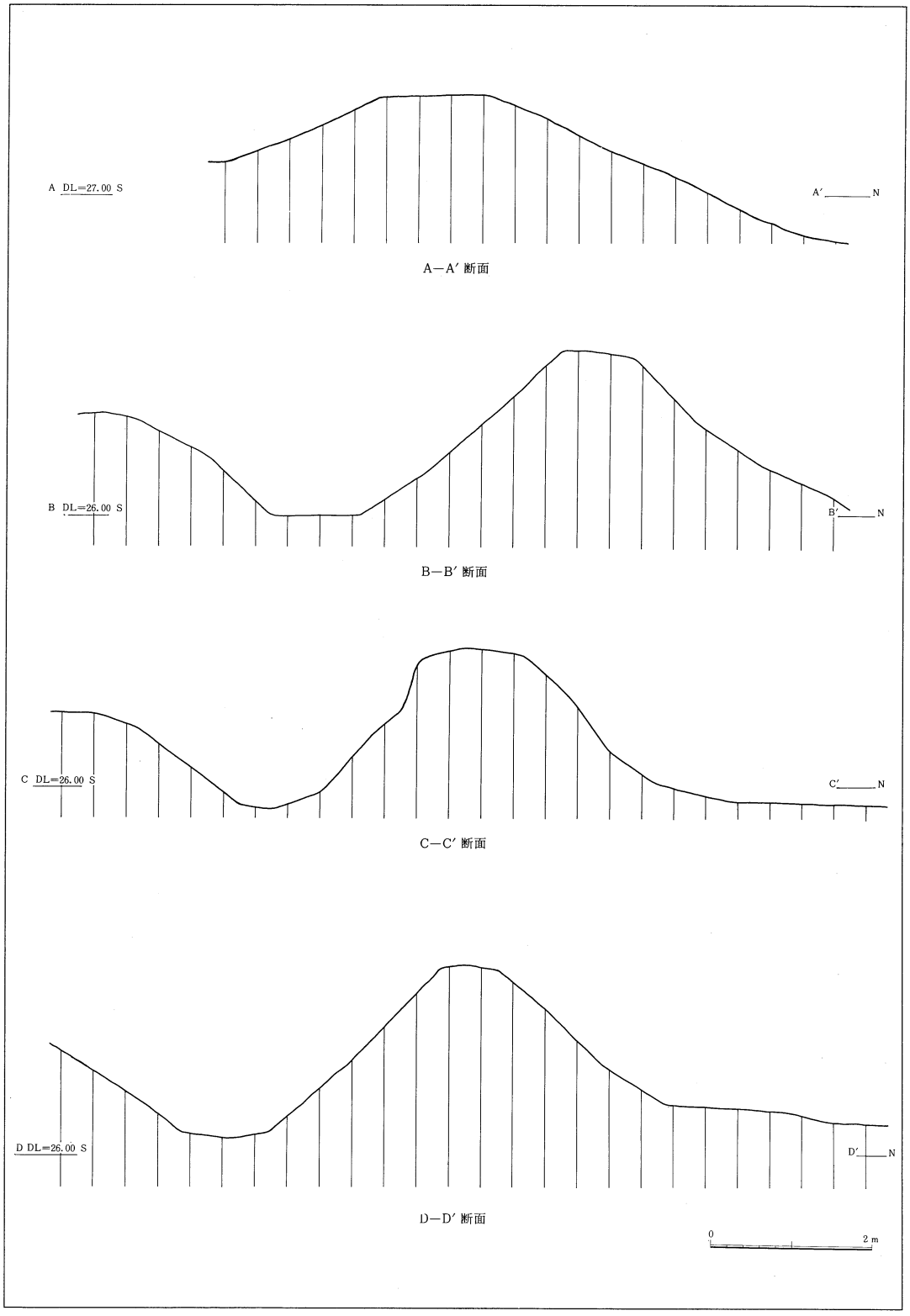
第１図　遺跡周辺図

II. 遺 跡 の 現 状

本調査区より西側と東側に野馬土手の一部が現在もなお名残りをとどめている。下の位置図の通り西側に残っている土手は、北に向い屈折している。ここで土手の南西隅が確認できるわけだが、土手が途中まで削平されて畑となり、その先は住宅になっていて、牧の範囲をつかむことはできない。土手断面図は比較的遺存状態のよい所を選び、A～Dまで4地点とった（第3図）。土手の高さはA地点で1.6m。B地点では、北側が2.4m、南側が1.68m。C地点では北側が1.9m、南側は削平され、正確な高さは不明であるが、残存している部分で1.1m。D地点では北側が2m、南側は削平され不明である。また堀であるが、北側はどの地点も現状では畑となっており、痕跡は残っていない。南側も埋没しているが、面影を若干とどめている。

『ふるさと八千代物語』によると「放牧場は松戸市の北小金から大和田新田、高津新田を経て千葉市にまでおよぶ南北20km、東西2～8kmにおよぶ大放牧場であった」と記載されている。

第2図　遺跡現状図



第3図　現存野馬土手断面図

III. 調　査　の　概　要

1．調査の方法

調査の対象が野馬土手に限定されていた為、トレンチは調査区外の土手の現状に合わせて南北方向に設定。各トレンチは長さ20m、幅１m、10mおきに11本設け、西側よりNo.１～No.11を付けた。

また、掘り下げは耕作土下の土層まで行い、堀の方向を調べた。確認面は耕作土下の黄褐色土層である。なお、調査期間が短いため、重要な位置と思われるトレンチから調査した。また、調査区内の現状は畑である為、土手は削平されてしまっていた。

2．日　誌

5月28日　機材搬入、トレンチの設定後、No.10、No.８、No.６、No.４、No.２トレンチを掘り下げる。それぞれのトレンチより溝と思われる落ち込みを２条ずつ確認。トレンチのセクションを実測。

5月30日　No.11、No.９、No.７トレンチを掘り下げる。それぞれのトレンチにおいて、溝と思われる落ち込み２条ずつ確認。

5月31日　No.２、No.４、No.７トレンチで検出された溝の掘り下げを開始。No.２トレンチ北側の溝より陶器の破片出土。北側の溝はどれも浅いが、南側の溝は２m近い深い堀である。それぞれ北側の溝のセクションを実測。

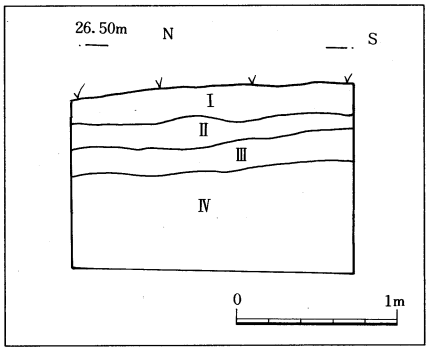
6月1日　引き続きNo.２、No.４、No.７トレンチ内、南側の溝を掘り下げる。西の端にあるNo.１トレンチを掘り下げる。南側の溝はどれも、コの字状に立ち上がり溝幅も広い。No.１トレンチより溝及び、その他の遺構の落ち込みは認められなかった。

6月3日　No.６、No.７、No.８、No.11トレンチ内溝の掘り下げ。No.７トレンチ北側溝、No.８トレンチ南北両側の溝より陶器の破片出土。No.11トレンチ北側溝より泥面子１点出土。溝のセクション実測。

6月4日　本日をもって発掘調査終了。

3．標準堆積土層

Ⅰ．茶褐色土層　耕作土。
Ⅱ．黒褐色土層　目立つ黒色。
　　ローム粒子多く含む。
Ⅲ．黄褐色土層　ソフトローム。
Ⅳ．黄褐色土層　ハードローム。



第４図　標準堆積土層図

Ⅳ．検出された遺構と遺物

1．遺　　構（第５図、第６図）

調査の結果、No.２、４、６、７よりNo.11トレンチまで、溝が２条ずつ検出された。なおNo.１トレンチは溝やその他の落ち込みは認められず、No.３、No.５トレンチは、短期間の調査である為位置的に重要でないと考えられ、調査を打ち切った。しかし、未発掘であるNo.３、No.５トレンチは両側のNo.４、No.６トレンチから溝が２条ずつ検出されているため、溝の検出の可能性は大きいと推定される。

溝は、現存している野馬土手に平行して延びている為、野馬堀である事が考えられる。なお、この２条の溝を、北側を北側溝、南側を南側溝と呼称した。

１）北側溝

確認面より上場の幅が1.3m～2.9m、下場30cm～44cm、深さ約60cm～74cmでＵ字形にすべてローム層に掘り込まれている。No.７トレンチ内だけ、落差のある溝が２条平行した形で検出されている。この溝の北寄りは、確認面より上場の幅が2.9m、下場で40cm、深さが約60cm。南寄りは、上場の幅が約２ｍ、下場で33cm、深さが約40cm。断面形は共にＵ字形に掘り込まれている。

溝の堆積状況を見ると、各トレンチとも共通して第Ⅲ層が埋土層であり、その下層が自然堆積土層となっている。

２）南側溝

確認面より上場の幅が2.92m～３ｍ、下場30cm～90cm、深さ約1.9m～2.4mで、すべてローム層に掘り込まれ、外反しながら立ち上がる。

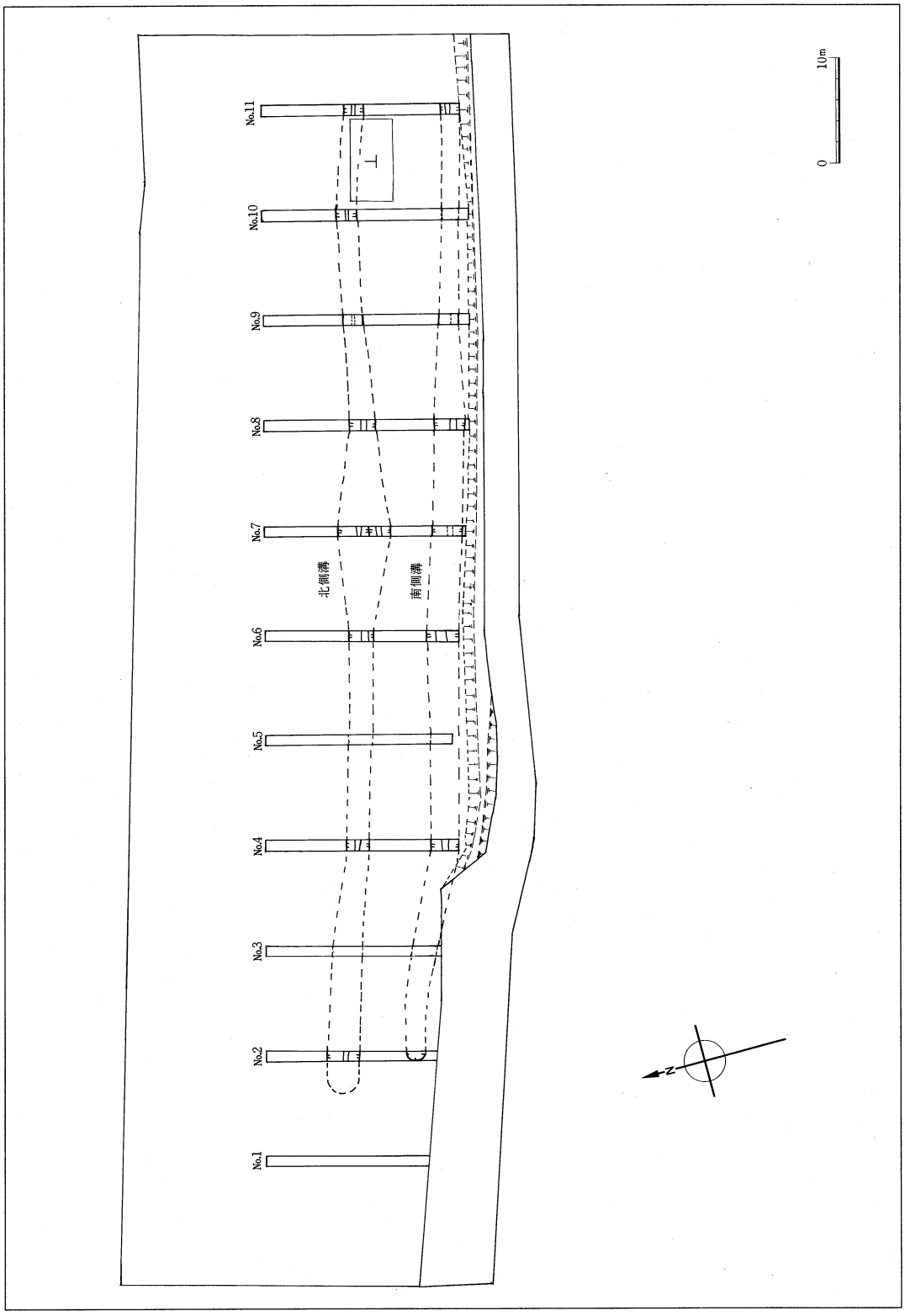
なお、この溝はNo.２トレンチで末端が検出され、ここで終わっている。

溝の堆積状況を見ると、No.４、６、８、11の溝の土層は、第Ⅲ層が、埋土層で、それより下層は多少、堆積層の違いはあるが、層序の土質は共通している。

No.２トレンチの堆積状況を見ると、他のトレンチのものとは異なり、第Ⅲ層の埋土層、第Ⅳ層の黒褐色の自然堆積土層は共通するが、その下の層は、一気に人為的に埋め戻された層である。

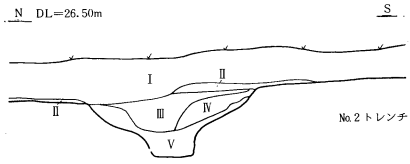
No.３トレンチでは、未発掘であるため、No.２トレンチのような堆積状態であるか、否かは不明であるので、この一気に人為的に埋め戻された溝の範囲をおよそでもつかむことはできない。

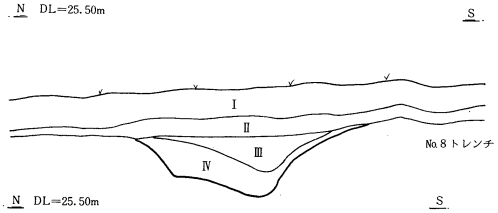
なお、北側溝、南側溝は共に多少屈曲しているものの平行して西側へ延びている。また２条の溝の間に存在していたと考えられる土手の位置の土層をみると、耕作土層となり土手の面影を残す層がどのトレンチにも見当らない。従って完全に土手が破壊されている事が明らかである。

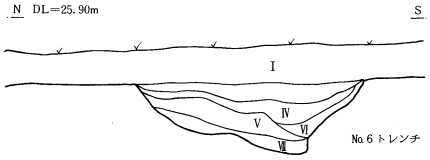


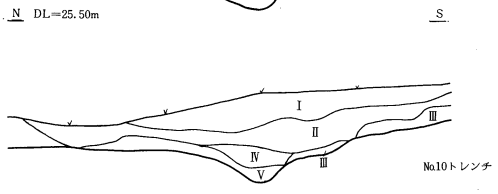
第5図　発掘全体図

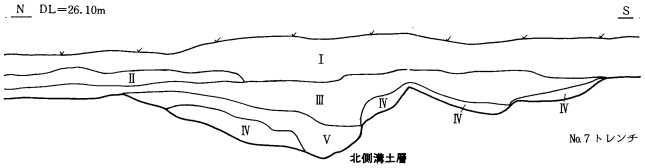
①北側溝セクション

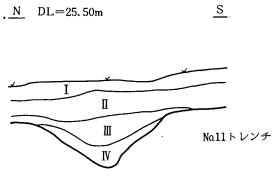








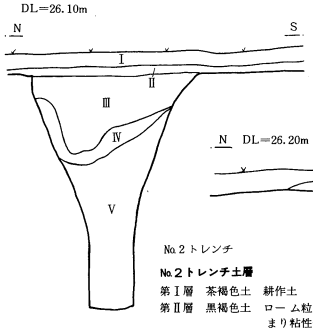




北側溝土層

第Ⅰ層　茶褐色土　耕作により攪乱、しまり粘性なくぼそぼそしている。
第Ⅱ層　黒褐色土　ローム粒子多く含む、しまり粘性ややあり。
第Ⅲ層　暗褐色土　ロームの混入あり、攪乱受けている（人為的埋土）
第Ⅳ層　暗褐色土　第Ⅲ層より色調暗、ローム粒子多く含む、しまり粘性ややあり。
第Ⅴ層　黒褐色土　ローム粒子多く含む、しまり粘性ややあり。
第Ⅵ層　暗褐色土　ローム粒子多く含む、ロームブロックφ10mm、しまり粘性ややあり。
第Ⅶ層　黄褐色土　硬質のロームブロック多く混入、しまり粘性なくぼそぼそしている。

②南側溝セクション



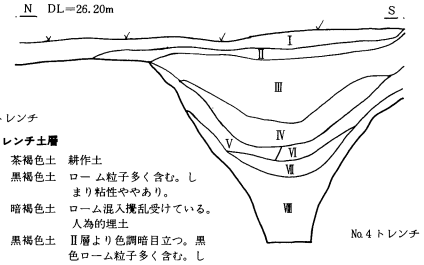
No.2 トレンチ

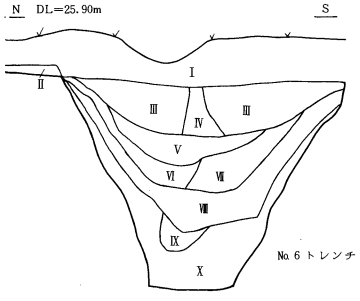
No.2トレンチ土層

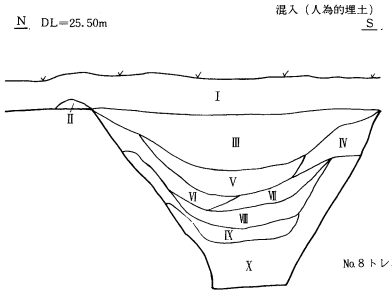
第Ⅰ層　茶褐色土　耕作土
第Ⅱ層　黒褐色土　ロー ム粒子多く含む。しまり粘性ややあり。
第Ⅲ層　暗褐色土　ローム混入攪乱受けている。人為的埋土
第Ⅳ層　黒褐色土　Ⅱ層より色調暗目立つ。黒色ローム粒子多く含む。しまり粘性ややあり。
第Ⅴ層　黄褐色土　硬質のロームブロック多く混入（人為的埋土）

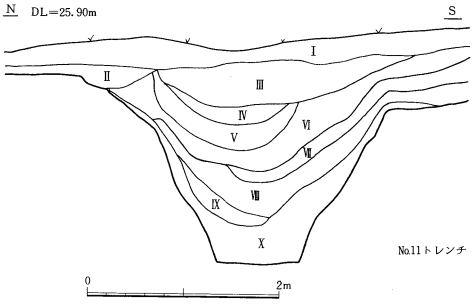
No.4・6・8・11トレンチ土層

第Ⅰ層　茶褐色土　耕作土、かなり攪乱され、しまり粘性なくぼそぼそしている。
第Ⅱ層　黒褐色土　ローム粒子多く含む、しまり粘性ややあり。
第Ⅲ層　暗褐色土　ロームの混入あり、攪乱を受けている人為的埋土。
第Ⅳ層　暗褐色土　ロームブロック点在、φ15mm～20mm、しまり粘性なし。
第Ⅴ層　暗褐色土　第Ⅲ層より色調暗、ローム粒子多く含む。しまり粘性ややあり。
第Ⅵ層　黒褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり粘性ややあり。
第Ⅶ層　黄褐色土　ローム粒子多く含む、ロームブロックφ10mm、しまり粘性あり。
第Ⅷ層　暗褐色土　ローム粒子多く含む。しまり粘性強。
第Ⅸ層　暗褐色土　第Ⅷ層より色調暗、ロームブロックφ30mm
第Ⅹ層　暗褐色土　第Ⅸ層より色調暗、ローム粒子、ブロック（φ10mm～60mm）多く含む、しまり粘性強。









第6図　北側・南側溝セクション

2．遺　　物

1）北側溝（北側溝より次のトレンチ内から遺物が出土。）

No.2トレンチ内の溝覆土中より陶器の破片が5点出土している。第7図1の陶器は底部3分の1の残存で器形は椀と考えられる。復元底径7.4cm。外面は光沢があり茶褐色を呈している。その他の4点は破片が小さい為、器形は不明。現在の陶片である。

No.7トレンチ内溝覆土中より陶器の破片が1点出土している。第7図2の陶器は全体の4分の1の残存で茶碗と考えられる。底径4cm。外面に呉須の絵付けがある。色調は乳白色。

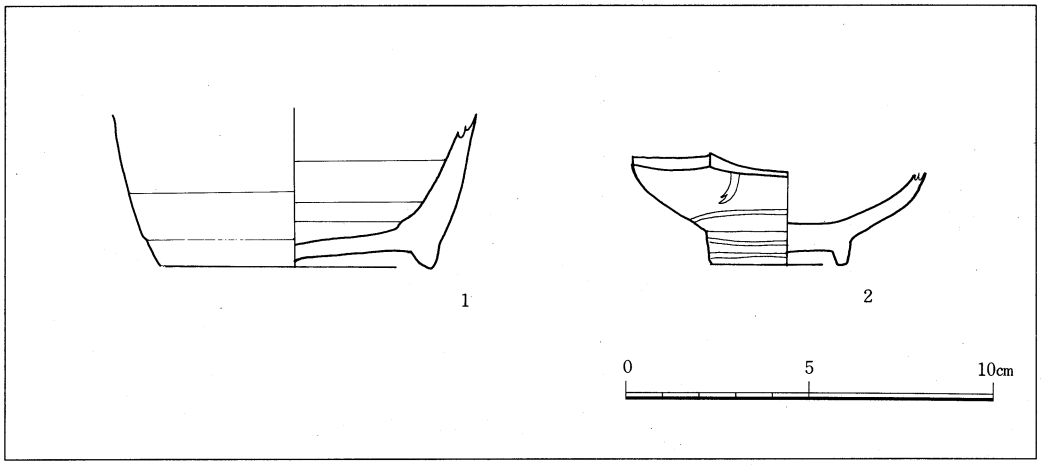
No.8トレンチ内の溝第Ⅳ層より陶器の胴部破片が1点出土している。色調は灰黄色。

No.11トレンチ内の溝第Ⅲ層より泥面子が1点出土。直径3.5cmの完形である。片面に文字か模様のようなものが不明瞭に認められる。焼成は粗である。

2）南側溝

No.8トレンチ内の溝覆土中より陶器の胴部破片が4点、砥石が1点出土している。

陶器破片4点のうち3点は色調・形から同一のものと考えられる。また、この3点が、破片の特徴より徳利であると考えられる。色調は光沢有る暗褐色。内面はロクロ回転のナデがある。もう1点の破片は覆土下層より出土。壷の破片であることが推定される。色調は灰黄色。近世初頭の瀬戸製品とみられる。砥石は、縦9.7cm、横3cm、厚さ0.4cm～1.5cm、中央部より、割れており、使用痕はその部分に斜めに入っている。



第7図　出土遺物

V．ま　と　め

溝の覆土下層より出土した遺物からみて、土手の構築は近世初めの頃と推定できる。崩壊は溝の堆積土層や覆土上層より出土した遺物からみて、昭和に入ってからと考えてよい。また、No.2トレンチの南側の溝がちょうど止まる形で検出されており、北側の溝もNo.1トレンチには確認されておらず、途中で止まっていると推定される。従って、これより西の部分が、野馬堀の入口であると考えられる。

本遺跡で多少関係する文献で、『兵部省式』によると律令下の下総国には、高津馬牧、大結馬牧、本嶋馬牧、長洲馬牧、浮嶋牛牧の五牧があったと記されている。このうち牛牧の浮嶋は駅馬として名を連ねている。『八千代市の歴史』には、この五牧のうち高津馬牧は現在の八千代市高津一帯をさすのではないかと記されている。また、この五牧が、享保期に八代将軍吉宗によって、幕府の直轄の牧場として整備された小金牧の起源とされている。この小金牧は、上野牧、中野牧、下野牧、高田台牧、印西牧から成り立っているので、小金五牧と呼ばれていた。

今回調査した、高津新田野馬堀は、享保七年実測の「小金牧各内牧の略図」によると、下野牧に位置する。さらに、『松戸市五香六実元山所在馬土手』の報告書によると、「徳川幕府は慶長十九年（1614年）に、従来の牧場を整理して下総に小金三牧（上野牧、中野牧、下野牧）を設置した」とあるので、遺構の構築年代は、慶長十九年の線が考えられるが、直接本遺構に関係した文書は発見されていない。

また、No.2トレンチより西側の部分が入口であるという推定であるが、地元の人の話によると土手は、東と西に残存する馬土手は、調査区の部分と合わせて連なっていたという。中近世の土手には「古土手」と「新土手」があり、新土手は、小金牧内の新田開発に伴なって、享保八年（1723年）に代官小宮山杢進により新田を馬から守るために築かれたもの。古土手は高さ3m前後あるのに対し、新土手の規模は小さいという松戸市の発掘例がある。この例に微して、今回検出された溝は古土手のものとも見られ、その上に新しい土手を築いた可能性が考えられる。

本遺構の牧の範囲は、直接関係する文書や絵図が発見されていないので、明らかではない。本報告書が近世牧の経営について、あるいはそれ以前の牧の解明に少しでも役立つ事があれば幸いである。

参考文献：『八千代市の歴史』　八千代市史編さん委員会　昭和53年
「松戸市五香六実元山所在馬土手」　（財）千葉県文化財センター　1983
「松戸市史」中巻
「ふるさと八千代物語」　小寺正美著　崙書房
「房総の牧」創刊号　昭和58年

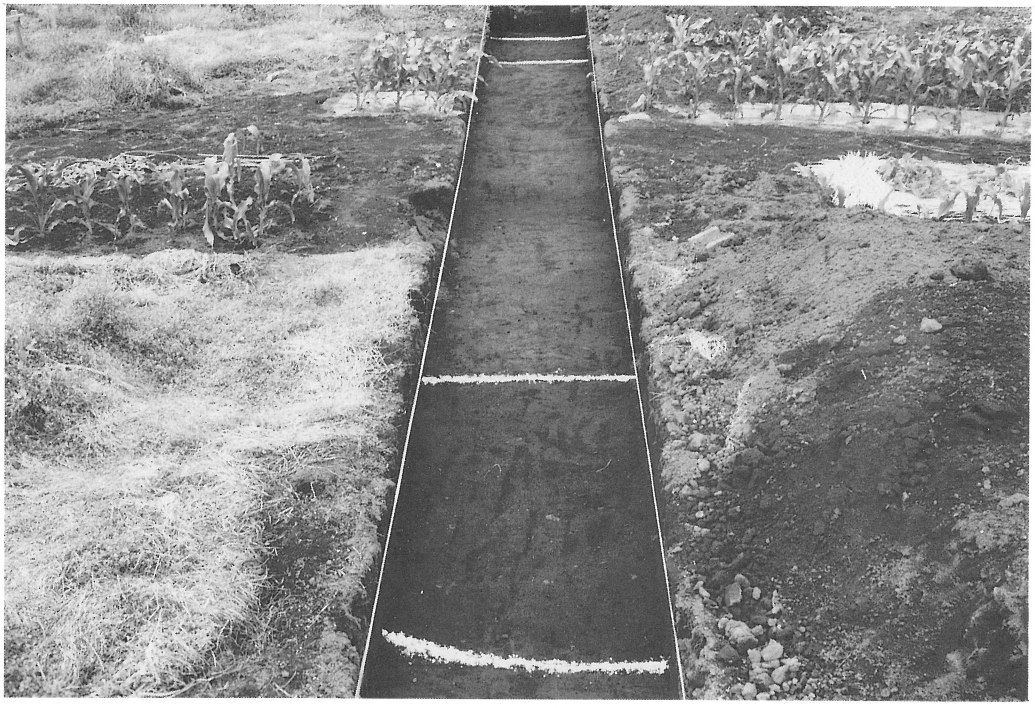
報告書抄録

ふりがな	たかつしんでんのまぼり
書名	高津新田野馬堀
副書名	―埋蔵文化財発掘調査報告書―
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	近江屋成陽
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045 八千代市大和田138－2 教育委員会生涯学習部社会教育課内 TEL047-483-1151
発行年	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たかつしんでんのまぼり 高津新田野馬堀	やちよし 八千代市 やちよだいみなみ 八千代台南 3－1－5	1221	251	35度 41分 24秒	140度 05分 48秒	1985.05.28～ 1985.06.04	163㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高津新田野馬堀	野馬堀	江戸時代	野馬堀　2条	近世陶磁器 泥面子	

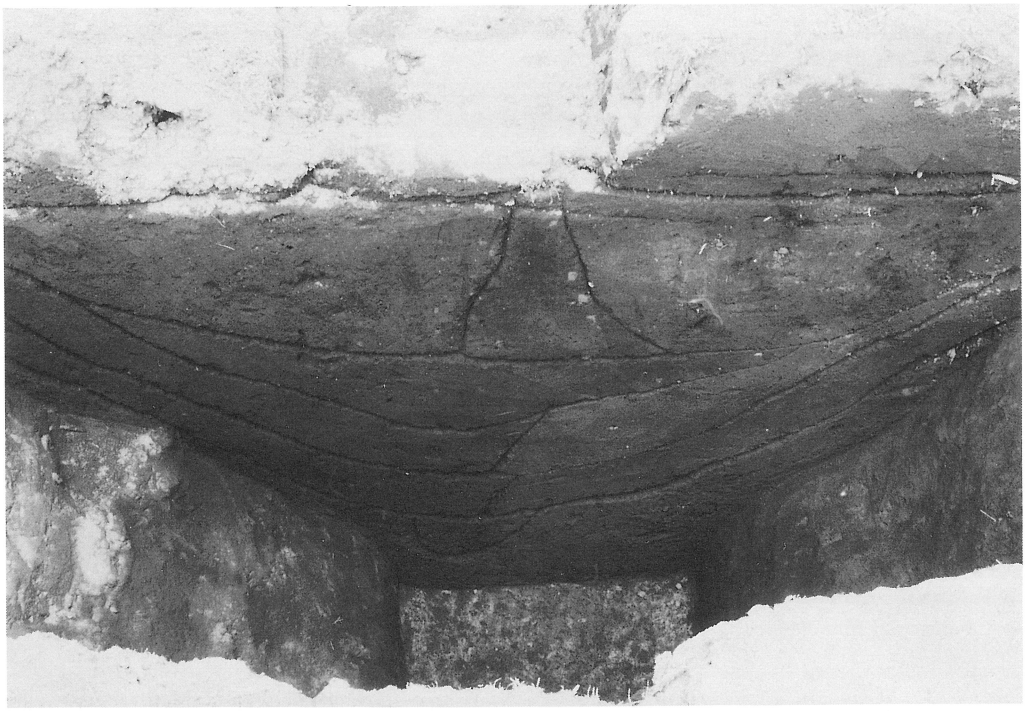
図版1



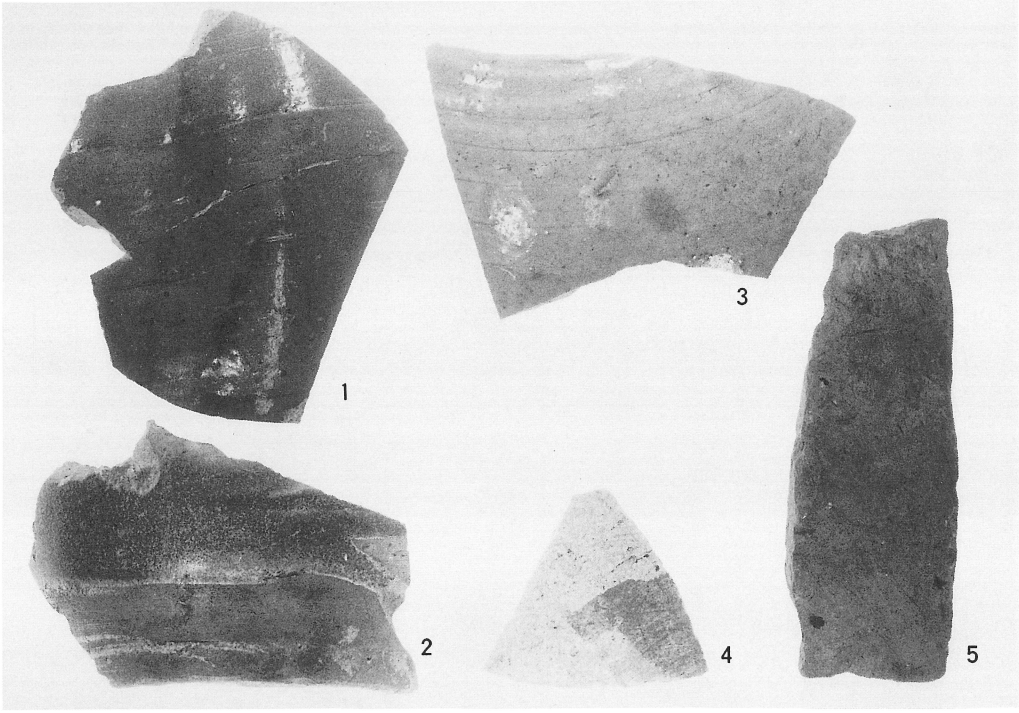
No.4 トレンチ　遺構確認状況

No.4 トレンチ　北側溝検出状況

図版2



No.6トレンチ　南側溝検出状況



出土遺物（1，3，5　No.8トレンチ　南側溝出土　・　2，4　No.2トレンチ　北側溝出土）

千葉県八千代市

高津新田野馬堀

―― 埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

印刷日　1999年3月31日
発行日　1999年3月31日
発　行　藤和不動産株式会社
編　集　八千代市遺跡調査会
千葉県八千代市大和田138－2
電話 047(483)1151 内6111

印　刷　株式会社 山下印刷
電話 047(430)8221